

『管子』研究の現状と課題

原 宗 子

(一) 『管子』研究の出発点

中国思想史研究史上に占める、胡適『中國哲學史大綱』(一九一九年)の意義については、夙に金谷治氏も指摘するところであるが、『管子』を、歴史学の史料として扱うことも、この書に始まったと云えるだろう。すでに晋の時、傅玄が「半ばは後の好事者の加うる所」と喝破して以来、現存『管子』の雑駁さについては、中国前近代の著作の中でも、幾多の指摘がなされてきた。が、さらに、この『中國哲學史大綱』第一篇導言¹においては、偽書としての『管子』の成り立ち方が追求され、遺書を求める漢代の風潮を背景に、できる限り長篇の書を偽作し多額の金銭を得ようとする意図のもとに、あれこれを取り集めた「託古発財」の書としてできなかったのが『管子』だ、と想定されたのである。胡適はまた、同じ偽書でも、理想を古人に託す「託古改制」の書が、往々第一流の思想を内在させているのに対し、『管子』の如き「託古発財」の書は、下流の人才のものであり、容易に馬脚を露す、とも述べている。

しかしながら、胡適は、同時に、かかる「偽書」を史料として採用する場合の、彼自身の方法をも提示している。第十二篇古代哲学之終局・第二章所謂法家において、『管子』の大部分を前三世紀にできあがったものとみなし、前三世紀の史料の参考にしようとする述べているのが、その一つである。また、この章は「中国古代に法家という学派はなく、諸家の体系の中に、法理学・法治の学があっただけだ」との彼の説を展開するものであるが、その「法理学」という用語の内容説明にあたって、「法理学」の根本概念のひとつとして「無為主義」をあげている。そしてそこに、「法家」思想に受け入れられた「無為」のあり

様を示す史料として、『管子』禁蔵篇・白心篇の文章を用いている。これが、胡適の提示した今一つの方法だといえる。

すなわち、胡適によって『管子』は、

①全書に通貫する思想のない寄せ集めの偽書。

②その偽書の材料となった著述が成立した時代を確定すれば、その時代を表す史料として用いうる資料集。

③自己の所論を展開するために必要な文辞を、適宜切り取って利用できる素材。

という三種類の扱い方を受けている。むろん、この三種類の扱い方は、各々独立して存在するものではなく、胡適の意識中に、一貫した論理で連繫されているであろう。すなわち、①がすべての前提となり、②の時代設定作業を完了すれば、③は自由に行いうることになるのである。が、同時に我々は、胡適において、②の時代設定作業自体が、③で展開されるべき所論に密着してなされていることに留意せねばならないだろう。

さて、胡適の方法のうち、③の場合、即ち、『管子』から、何らかの思想内容を抽出する作業の場合には、「管仲は実行の政治家だったのだから、法理の書を著すはずがない」との前提に立って、つまり彼が設定した歴史的事実としての管仲像を基準に『管子』の偽書性を説き、その上で『管子』中の文辞を、彼の「法理学」の体系にあてはめる、という二重の仮構性を含むものであったから、このままでは定説となりうべくもなく、ただちに一九二二年、梁啓超によって反論された²。ただし、梁啓超のこの時の批判点は、『管子』に即しては、それが管仲に仮託されたことの意義を胡適が看過しており、『管子』中に何ら

— かの形で反映しているはずの管仲の思想を無視している、とのいわは素朴な指摘であったが、以後も後述する羅根澤らから直接間接に様々な反証が提示され、『管子』の思想内容に関する胡適説は、現在としたる影響を残してはいないようである。

しかしながら、『管子』をとり扱う手法については、ここに整理した胡適の三種類の手法が、各々命脈を保ち続け、『管子』＝偽書＝無秩序な寄せ集め、という図式を基礎として始まった近代以降の『管子』研究は、それが覆れた

表 I 自己の所説のために『管子』の一部を利用したもの

No.	題	日	著	者	年	次	収	録	誌	書	等	備	考
1	中國哲學史大綱		胡	適	1919		商務印書館						
2	先秦政治思想史		梁	啓	1922		支那学	3 卷 3 ~ 5 号					
3	法家と儒家との関係		本	成	1922		支那学	3 卷 3 ~ 5 号					
4	道家の思想と其の開展 (その展開)		津	之	1927		東洋文庫論叢	第 8 (岩波書店)					
5	中國哲學史		馮	友	1931		文史雜誌	5 卷 3・4 期					
6	老子考		劉	蘭	1945		羣益出版社						
7	十批刊書		郭	沫	1945		羣益出版社						
8	法家の法実體主義		田	耕	1947		福村書店						
9	史記貨殖列伝研究		宇	清	1959, 51 ~ 55		漢代社会經濟史研究						
10a	先秦諸子思想概要		杜	國	1949		三聯書店						
b	荀子従宋尹貴老學派授了什麼		板	長	1955		先秦諸子的若干研究						
11	司馬遷の經濟思想		野	八	1951		北大史学 1						
12	中国における聚落形態の変遷について		宮	定	1952		大谷史学 6 号						
13	儒家法家と武帝の統制政策		規	一郎	1953		東洋の文化と社会						
14	什伍制度についての考		桜	芳	1954		東京学芸大学研究报告第 6 集						
15	戰國社會封建化過程		葉	華	1956		歴史研究 1956—1						
16	先秦時代の山林藪澤と秦の公田		増	夫	1957		中国古代の社會と文化						
17	中國思想通史		侯	他	1957		人民出版社						
18a	由西周到前漢的耕作制度		外	于	1959		農史研究集刊第二册						
b	前漢前期的重農學說		赤	塚	1960		上海人民出版社						
19a	古代事實と辨證的思維の成立過程を中心として—		赤	忠	1954		東京支那学報 5 号						
b	老子中における虚靜説の展開		”	”	1958		” 9 号						
c	古代の信仰體験と道家の思辨法		”	”	1963		斯文 35 号						
d	道家思想の原初の形態		”	”	1968		東京大学文学部研究报告第 3 集						

このうち第二のあとがきは表 II に入れるべきであるが、便宜上一括した。

『管子』に直接言及するのは 19—c 論文からであるが、一連の研究とみなすべきものをあげた。

e	『莊子』中における『管子』心術系統の説	赤塚友蘭	1968	日本中国学会報 20
20 a	先秦道家哲學主要名詞通釋	馮	1957	北京大學學報 1959—4
b	先秦道家所謂「道」的物質性	友蘭	1958	中國哲學史論文集
c	先秦道家三家的異同	鋒	1959	哲學研究 1959—4
21 a	論宋尹學派	關	1959	哲學研究 1959—5
b	莊子外雜篇初探	馮	1961	哲學研究 1961—2
22	秦漢時期祖佃關係的發生與發展	馬翹	1959	歷史研究 1959—12
23	兩漢時期的雇傭勞動	塚田勝美	1959	北京大學學報 1959
24	諸子百家	山佐	1961	岩波新書
25	塩鉄論所引管子考	佐藤武重	1961	支那學研究 第26号
26	中国古代工業史の研究	山佐	1962	吉川弘文館
27	從管子的幾篇文章來看戰國時代的社會	李馮	1962	中國的封建領主制和地主制
28	中國哲學史新編	佐藤武重	1964	人民出版社
29	漢代の水利機構	佐藤武重	1965	中國史研究 第4号
30	管子と周禮の關係について	佐藤武重	1966	東京學芸大學紀要 18集
31	中國文化叢書 3 思想史	金谷治・渡辺卓一	1967	大修館
32 a	漢代における里と自然村とについて	池田雄	1969	東方學 38
b	中国古代における聚落形態について	古賀重明	1971	中央大學文學部紀要 11
c	中国古代の伍制について	古賀重明	1974	東方學 41
33	什伍の制をめぐって	古賀重明	1971	法制史研究 24
34 a	阡陌制下の家族・什伍・閭里	宗彦	1974	史觀 89
b	中国古代の家族・村落制度の研究について	宗彦	1974	文物 1974—3 期
35	從臨邛一号漢墓出土的竹簡看秦始皇帝“焚書”的 革命措施	洪柏	1975	歷史研究 1975—4
36	試論先秦法家的戰備思想	洪柏	1975	歷史研究 1975—6
37	革命就是解放生產力—諸商君書札記	洪柏	1976	文物 1976—3
38	黃老之學是維護封建統治的法家重要流派	田昌五	1976	文物 1976—4
39	再談黃老思想和法家路線	田昌五	1977	歷史研究 1976—6
40	法家意識的歷史演變	吳彭	1977	文物 1977—1
41	李芝《鹽井賦》初探	龐鐘	1978	文物 1977—10
42	馬王堆帛書老子解開了思孟五行之迷	龐鐘	1978	文物 1978—2
43	黃老帛書的哲學思想	鄭小野	1978	文物 1978—2
44	晉夫考—說雲夢秦簡札記	鄭小野	1978	文物 1978—2
45	氣の思想	戶川芳郎	1978	東京大學出版會
46	劇場都市	大室幹雄	1981	三省堂

表 II 『管子』中の特定の篇を、他篇と独立させて解明することを企図したもの

No.	題 目	著 者	年 次	收 録 誌 書 等	備 考
47	答德國顧復禮博士問管子輕重	張 石 武	1927	史學雜誌 (南京中國史學會) 1 卷 6 期	
48	管子における三分益損法	井 内 義 節	1936. 11	史學雜誌 46 卷 11 号	
49	管子の心術と内業	劉 郭 沫 若	1942 (1941. 9. 23 執筆)	支那學 10 卷特別号	
50	管子中所見之宋鉞一派學說	郭 沫 若	1943	說文月刊	
51	宋鉞尹文遺著考	郭 沫 若	1944	青銅時代	
52	管子輕重論	長 岡 崎 田	1950	商大論集三	
53	三國伍鄙の制について	藤 田 元 春	1950	羽田博士頌壽記念東洋史論叢	
54	管子の本地論	郭 沫 若	1951	山梨大學文學部研究報告 No. 2	
55	侈靡篇的研究	陳 恆 力	1954	歴史研究 1954—3	
56	管子侈靡篇探微	馬 重 泉	1955	新建設 1955—4	
57	管子牧民・乘馬・八觀等探微	馬 重 泉	1956	新建設 1956—6	
58	關於“管子”“輕重”篇的著作年代問題	馬 重 泉	1956	歴史研究 1956—12	
59	管子「九敗」私解	容 肇 祖	1956	京都大學文學部「五十周年記念論集」	
60	駁馬非百“關於管子輕重篇的著作年代問題”	容 肇 祖	1958 1957 執筆	歴史研究 1958—1	
61	管子地員篇校釋	夏 緯 瑛	1958	中華書局	
62	管子地員篇校釋	夏 緯 瑛・林聿時	1958	中國哲學史論文初集	
63	管子地員篇的思想体系	関 友 友	1959	光明日報史學副刊 1959. 5. 8	62~65は、一見一連の論文のようであるが、 各々、問題追求の角度が異なっているため、 独立させた。
64	管子地員篇研究	友 友	”	農史研究集刊第一冊	
65	管子度地篇探微	王 清 神	”	”	
66	管子地員篇的地区性探討	友 友	”	” 第二冊	
67	管子の書における人性論の考察	水 谷 正 清	1960	大阪大學南北校研究集録 8	
68	周禮の泉府と管子の輕重収斂法	神 宇 都 宮	1963	東京支那學報 9	
69	管子弟子職篇によせて	”	1963	名古屋大學文學部研究論集史學 10	
70	管子問篇試論	”	1964	東洋史研究 23 卷 4 号	
71	論管史輕重	葉 長 谷 川	1965	經濟研究 1965—1	
72	管子の研究	相 俊 武	1967	駒沢大學研究論集 10	
73	「管子」書と五行說	原 藤 三	1967	東洋學報 50	
74	「管子」に見える治水說	佐 武 敏	1969	中國古代史研究第三	
75	《侈靡篇》的經濟思想和写作時代	巫 巫	1979	中國社會科學院經濟研究所集刊 1	巫氏の「《侈靡篇》注釈和今釈」も同書に収録。

表ⅢA 『管子』全書について、一定のテーマのもとに考察したもの

No.	題	日	著者	著者	年次	収録誌書等	備考
76	中国哲学史		狩野直喜	大司気	1906~1924		
77	戦国文篇中之篇式書体一個疑問		傅斯年	大司気	1920	中央研究院歴史語言研究所集刊1—2	岩波書店刊は1953年。
78	管子之財政思想		姚步慶	大司気	1929	国立中央大学半月刊 1卷10期	
79	管仲之経済思想		唐積慶	大司気	1935	中国経済思想史 6篇1章	
80	管子経済思想		黄積慶	大司気	1936	商務印書館	
81	管子の経済思想		徐文慶	大司気	1942	先秦経済思想史論 5章1節	
82	管子政治思想的探討		于・李長年	大司気	1955	Journal of Oriental Studies II-1	
83	管子的重農学説和水利土壤知識		友胡	大司気	1959	中国農學史上冊 第5章	
84	管子経済学説		胡斐	大司気	1962	中国経済思想史 上, 第10章	
85	管子評議		注	大司気	不明		
86	管晏思想折議			大司気	1976	学海出版社	学位論文らしい手稿本のリプリントであり、奥付がない。

表ⅢB 『管子』全書の成立事情を視野に含むもの

No.	題	日	著者	著者	年次	収録誌書等	備考
87 a	管子と周禮		小柳	大司気	1914	東洋思想の研究	
b	管子の本文批判		羅根澤	大司気	1916	続東洋思想の研究	
88	管子探源		小林	大司気	1931	中華書局	
89 a	管仲觀の変遷		木村	大司気	1935	歴史学研究 4卷6号	
b	「管子」の一考察		英一	大司気	1938	早稲田大学東洋思想研究室年報 第2支那学 10卷特別号	
90 a	管子の成立に関する二三の考察		木村	大司気	1942	支那学 10卷特別号	
b	管子の輕重篇について		問一多・許維通・郭沫若	大司気	1960	福井博士頌寿記念東洋思想論集	
91	管子集校		王叔珉	大司気	1956	科学出版社	
92	管子輯證		町田三郎	大司気	1958	中央研究院歴史語言研究所集刊 29	
93 a	管子四篇について		町田三郎	大司気	1961	文化 25卷 1号	
b	管子幼官考		町田三郎	大司気	1961	集刊東洋学 1	
c	時命説について		町田三郎	大司気	1961	文化紀要 9	
d	管子の箴言について		町田三郎	大司気	1962	集刊東洋学 5	
e	管子の思想—外言類を中心にして—		町田三郎	大司気	1963	集刊東洋学 7	
f	管子輕重篇について		町田三郎	大司気	1963	日本中国学会報 15	
g	塩鉄論について		町田三郎	大司気	1965	集刊東洋学	
h	再び管子四篇について		町田三郎	大司気	1966	東北大学教養部紀要	
94	『管子』中の強兵思想		金谷	大司気	1979	森三樹三郎博士頌寿記念東洋史論集	
95	桑弘羊の財政策		稲葉治郎	大司気	1980	三田村博士古稀記念東洋史論叢	

表IV 『管子』の抄訳・訳解書

No.	題	著者	年次	収録誌書等	備考
96	管子 Kuantzu A Repository of Early Chinese Thought	唐敬果 W. A. Richtert	1925 1965	台湾商務印書館 Hongkong University Press	No.96は旧形式の注釈本だが、『管子』の現代中国語訳は、徳法闘争論議の活発であった頃にも、韓非子などに比し、[法家]路線として『管子』を讀むことの一連の叙述、その文章として『管子』を讀むことの困難さを示すもの刊行が企画されていったが、未だ刊行を聞かない。翻訳書は、たとえ抄訳でも貴重な存在だと考へる。
98	管子	松本一男	1967	徳間書店	
99	管子	柿村洞	1970	明德出版	
100	管子入門	中国人民大学・北京经济学院《管子》經濟思想研究小組	1984	PHP 研究所	
101	《管子》經濟篇文注釈	中国人民大学・北京经济学院《管子》經濟思想研究小組	1980	江西人民出版社	

表V 『管子』に関連する、板本・注釈書・出土物等を論じたもの

No.	題	著者	継承者	年次	収録誌書等	備考
102	管子補注作者劉績	羅玉	羅欣	1956	東北人民大學歷史系史學集刊1956—2	『管子』よりは章炳麟に焦点がある。
103	郭沫若先生“管子集校叙録”之商榷	王向	王向	1957	學術月刊 1957—6	
104	章氏管子餘義訂	山東省博物館臨沂文物組	許福頤	1965	大陸雜誌 31卷12期	
105 a	山東臨沂西漢墓發現《孫子兵法》和《孫臏兵法》等竹簡的簡報	許福頤	羅福頤	1974	文物 1974—2	
b	略談臨沂銀雀山漢墓出土的古代兵書殘簡	羅福頤	羅福頤	“ ”	“ ”	
c	臨沂漢簡概述	羅福頤	羅福頤	“ ”	“ ”	
106	臨沂銀雀山漢墓出土《王兵》篇釋文	羅福頤	羅福頤	1976	文物 1976—12	
107	馬王堆漢墓出土帛書《春秋事語》釋文・解題	張大	張大	1977	“ ” 1977—1	
108	臨沂竹簡兵書と兵家	張大	張大	1977	“ ” 8号	
109	馬王堆出土儒家古佚書考	張大	張大	1978	東方學 56	
110	古佚書「經法」等四篇について	張大	張大	1979	加賀博士退官記念中国文史哲學論集	

量的に、圧倒的多数を占めるのが、表Iのあるテーマを展開するために、『管子』中の文辞を切り取って利用した論考であり、胡適の③の方法の系譜にあるとみなしうる。ただし、胡適の場合、③の方法は、②の当該資料の時代設定を前提としているのに対し、この表に示した論考の中には、利用する『管子』の文の時代性を慎重に検討していないものも混っている。それは、胡適の①の観点、『管子』が無秩序な寄せ集めの書であるとの見解を、より徹底させ、『管子』を来歴の不明瞭な、断片的素材の集大成とみなし、他の「意義ある」

史料の傍証に、断章取義的に利用する傾向が生じたからである。むしろ、かかる傾向が、すべて胡適の直接的影響にのみ端を発しているわけではない。日本においては、一九二七年に津田左右吉『道家の思想と其の開展』が発表されたが、そこに四十条ほどの『管子』に関する言及がみられる。この著作は、いまでもなく、津田の構想する道家思想の歴史を述べることが目的の書であるから、『管子』諸篇に散在する文辞は、道家思想発展の時間列を構成するに資するものが撰びとられ、『管子』成立事情に関する津田の見解

と並んで、その時間列の中のしかるべき箇所に組み込まれている。従って、『管子』を構成している諸篇の執筆年代は、その篇自体を統括的に分析して考察されるのではなく、たとえば、「帝↓王↓覇」の階梯を記載する文献より、「皇↓帝↓王↓覇」の階梯を記載する文献の方が新しい、とのテーゼを予め立て、それらの語を含む篇について、乗馬篇よりも幼官篇の方が後出であるとの結論を導き出す、という方法によって考察されている。また『管子』成立事情については、『漢書』芸文志所載の『筦子』を、ほぼ現本『管子』と同様であると認め、それは、戦国末から武帝期頃までにかけて、刑名の学を講ずる一団の学徒の意見をはじめ、種々の思想・種々の学派の主張によって書かれた多くの篇章が、漢代思想界における、法家・儒家と、道家との結合の大勢のもとに、編纂されたものであると見ている。従って津田は胡適とは異なり、『管子』の編纂過程にある程度の思想的意義をも認めているのではあるが、かかる『管子』の成立を構想すること自体が、津田にとつては、漢代思想界において道家と儒家が法家に影響を及ぼしたことを証明する材料となつてはならない。『道家の思想と其の開展』が、いかに多くの史料を用い緻密に構成された書であろうとも、その素材にされている『管子』の側から『管子』の扱われ方について見直してみれば、全体として、胡適における③の方法で『管子』を利用しているにすぎないのである。

表Ⅲは、『管子』の全書を論述の対象とした論考である。特定のテーマについて、『管子』にはどのような叙述がなされているか、という関心のもとに、全書を鳥瞰する方法をとつたものを④、本文の文字校訂を含む現存『管子』の編成状況の検討・成立事情の考察を視野に含むものを⑤とした。このうち④は、検討の対象は『管子』全書を視野におさめているとは云え、検討すべきテーマが先行しており、論述の形の上では、結果的に表Ⅰの諸論考に類似するものを生んでいる。⑤の中で、先駆的な業績は、一九三〇年の羅根澤『管子探源』⁸⁸である。彼は、『管子伝』の著者でもある梁啓超の「心喪弟子」を名乗つて、この書を著したのであるが、書中では「牧民」諸篇「三匡」諸記には、その政治の大端において見るべきものがあつたであろう管子の遺説が、残つてもいるだろう」との留保を残して梁啓超説への配慮を示しつつも、余の『管子』全篇について、個々別々に、その成立年代の推定と執筆者の思想系統の比

定を果たし、『管子』を分截しつくしたのである。羅根澤は、『管子』諸篇が管仲に仮託された理由についても若干の見解を述べており、胡適の「託古發財」説には賛同していない。また、諸篇の思想内容把握にあたつても、例えば君臣上下篇の条において、胡適が老子を孔子の先に置くことに反論し、梁啓超「評胡適之中國哲學史大綱」をひいて、古えの「學術在官」と、道家の儒家に対する晩出性を主張している。にもかかわらず、『管子探源』が、『管子』を分析するにあたつて用いた手法自体は、胡適の方法をより徹底し細密にしたものだとみなさねばならないであろう。

表Ⅳは、近年における『管子』の抄訳書をあげた。

表Ⅴは、『管子』の注釈書・板本、および出土資料などの、現存する物質史料に即して考察しているものをあげた。

さて、『管子』に言及する論考の中で、重要な提言をしているものは、多く表Ⅱの、特定的一篇もしくは数篇について、『管子』中の余の部分と切り離し、分析的に扱った論考の中みることができるといえる。現存『管子』の材料となつた諸篇を執筆した者が一人ではなく、また各篇の執筆された時代が多様であることを考慮するならば、この方法が『管子』研究の主流を占めることは、当然だともみなされよう。特に、個々の篇に記されていることからの内容を、深化させて考察しようとする場合には、素材をその篇内の文辞に限つてのみ取り、考証を完結させるほうが、より安全に精密さを得られるであろう。ここから、郭沫若氏が「侈靡篇的研究」⁵⁵で述べている「管子の書はいくつかのグループに分けて研究を進むべきである」との主張も生じてくる。

この方法に拠るものには、当該篇の成立年代を考証しているものも、していないものもあるが、はっきりした年代考証を欠いてはいても、たとえば宇都宮清吉氏の二篇などは、その篇の分析として、論文としての究極の形の一つを示すものだといえよう。が、宇都宮氏が「管子弟子職篇によせて——古代専制体制と社会諸集団との関係に就いての考察」⁶⁹において、「管子そのものは書誌学的に問題の多い書であるけれども、当の弟子職は幸いにして、それらの問題にふれないように使用することができると述べて、氏自身の校訂になる「弟子職篇」正文を発表し、「管子問篇試論」⁷⁰においても同様に氏が問篇に与えた「古代史研究上きわめて含蓄的な史料」という評価にふさわし

い形が備わるように、本文を校訂していくのを読む時、それを『管子』の研究とみなすことは、もはや困難になってくるのではないだろうか。かかる方法で『管子』中のある篇が分析され、最も幸いな場合には、原初的なその篇の文章を復原しえたとしても、それは『管子』の素材の研究と呼ぶべきものではないか。

にもかかわらず、かかる方法を以て『管子』の特定の篇がとり扱われているからには、『管子』に通貫する編成原理はない、との胡適流の見解に立つか、あるいは『管子』の編成原理などは、たとえ存在していたとしても考慮するに値しないとの判断に立って、論が進められていると考へざるをえない。先にも述べたように、郭沫若氏は、はっきりと、『管子』の書をいくつかのグループに分けて研究を進めることを提言しているが、事実郭氏は、侈靡篇の他にも、心術上・心術下・白心・内業のいわゆる管子四篇や樞言篇について、『管子』中の他の部分と異なる学派の学説だと考証する論を発表しているし、関鋒氏、陳恆力氏も異なる篇について、異なる執筆者を想定した複数の論考を発表している。他の論者によっても、この郭氏の主張に結果的には添う形で管子四篇や、軽重諸篇、あるいは地員篇・度地篇等を独立した文献として考察する論が発表されている。郭沫若氏は、「管子集校引用校釈書目提要」^{II}の末尾において、羅根澤『管子探源』を「材を取る所無し」と断じきっている。しかし、なるほど郭氏は『管子集校』中に羅説を用いてはいないものの、氏が発表した『管子』に関する諸論文は、『管子』が羅根澤によってバラバラに分解されたという地盤に依存することで、ひいては、胡適以来確実になりつつある、『管子』の価値を史料の寄せ集まりである点のみに見出す視点に同調することで、成立しているものなのである。郭氏以外の論者についても、こと『管子』に対しては、特定の篇のみを切り離して扱ってかまわない、むしろ切り離して扱ってこそ、雑書たる『管子』に存在する他の不純な要素を捨象し、当該の価値ある古代の史料のみを精緻に考証することが可能になるのだ、と考へられている場合が多いのである。

もつとも、かかる手法を以て執筆されている表IIの論考のほとんどが、その扱う篇を素材として、様々な古代史の問題を説明せんと企図するものであるからには、これらの論者が、そもそも一書としての現存『管子』自体に対する関

心を欠いていることも、あるいは当然なのかもしれない。このような態度は、表Iの、『管子』中の文辞を断章取義的に引用する諸論考においては、更に顕著に表明される。ここでは、論者にとって、論の展開に必要と認められた『管子』中の文辞が、その論を成り立たせうるような執筆者の思想系統なり時代性なりの考証に飾られて、利用されるのであるが、『管子』全書の成立が不確定であるがゆえに、あるいは確定する必要もないものとみなされうるがゆえに、その素材となった各篇、更にはそこに盛り込まれた二、三の文辞に、いかなる来歴を与えることも可能になるのである。

が、いかなる分野に対してであれ、かかる方法によって取り扱われた『管子』の文辞を素材として、中国古代史を論述するということは、真に可能なのであろうか。『管子』は確かに管仲の自著ではなからう。にもかかわらず『管子』という書名を有している、という意味ではまさしく偽書である。が、かかる意味で偽書であると認定しさえすれば、あるいは『管子』に盛られた内容が、既知の中国古代の諸学派の一つには比定しえないことを確認しさえすれば、その中の任意の文辞を現存『管子』の書の全体から切り離し、それを史料として、古代の実像を描くことができるのだろうか。

この点に関し、表I II III各々のタイプに亘って多くの論考が対象としている『管子四篇』をめぐって、どのような考察がなされてきたかを例にとり、考えてみたい。

(二) いわゆる管子四篇の研究状況

現行『管子』における心術上篇・心術下篇・白心篇・内業篇の四篇は、他の篇とは異なった思想内容とまとまりをもつものとして、その来歴・意義を考察する論者が多い。この四篇の研究史については、最近では小野沢精一氏が、篇中に述べられている「氣」の概念をめぐる諸論を整理する形で論じているが、^Iこの四篇の思想的内容については後の章でふれるので、ここでは『管子』全書と四篇の関係、及び四篇相互の関係について、諸氏がどのように考察しているか、そしてその考察は、諸氏が四篇を中国思想史上に位置づける際の根拠とどのように関わっているか、という点にしばって、整理してみたい。

中国において、これらいわゆる管子四篇をめぐる論争の発端となったのは、

劉節「管子中所見之宋鉞一派學說」^{II 50}と、郭沫若「宋鉞尹文遺著考」^{II 51}であった。両論は、四篇と『老子』との時間的前後関係について見解を異にしているものの、四篇に見られる言葉が、『莊子』天下篇・『荀子』非十二子篇・正論篇、『韓非子』顯學篇等に見られる宋鉞の學說に類似すると考え、四篇を『管子』中の他篇から独立した宋鉞・尹文の遺説であると見ることにおいて、一致している。ただ、劉節氏が四篇を一人の本師の説にもとづいて各自解を作ったものと見ているのに対し、郭沫若氏は、白心篇を、宋鉞の後輩たる尹文のものだと見ている。両氏はまた、心術下篇と内業篇とに重複する文辭が存在することに即して、『管子』の編集にふれているが、劉節氏は、その事情を、同様の性質の文章を『管子』編者が二ヶ所に分在させ、別の篇名を与えたのだと見ている。他方、郭氏は、劉向序録が五六四篇から四八四篇を校除したと記していることに注目し、残っているのは八十篇であるはずなのに、現在篇名の存在するものが八十六篇であるのはおかしいと見て、牧民・形勢・立政・版法・明法の解は、現行の心術上篇同様、本来それぞれ本文に付随していたのであり、心術下篇は内業篇の副本であって重複しているのに「校除」しつくされなかったと見る。杜国庠氏の二論文はこの郭説の全面継承だといえよう。

劉節氏は四篇の思想を、「唯心主義」と規定したが、思想評価の面ではこの劉説を踏襲し、四篇の成立事情については郭説に依拠して、四篇を宋尹学派の遺著と認めているのが、侯外廬主編『中国思想通史』第十章四〜五節の立場である。ただしここでは、郭沫若氏の、白心篇を尹文の遺著と見る説に対しては、賛否を保留している。またこの論考は、四篇全体を対象として叙述されていながら、白心篇の文章を引用しての論述が一ヶ所もないため、『中国思想通史』が白心篇をどう評価しているのかを推測することはできない。

以上の諸説によって、四篇を『管子』から独立させ、先秦諸子中の一学派として扱う傾向が確立されたといえるだろう。

このような地盤の上に、劉節氏らの見解に対し四篇の思想内容の評価をめぐって、反論を展開したのが、馮友蘭・関鋒両氏である。両者共通の論点は、四篇の記載に「唯物主義」的傾向を認める点である。四篇相互の位置付けについては、馮友蘭氏は白心篇に、稷下の接子における「或使」の理論との関連を見る。関鋒氏は郭沫若説に一面で賛同し、彼が四篇の主要命題として摘出した

「法」「公」「君道無爲虚靜」の概念が、心術上篇の伝と白心篇とにあることを以て、主に尹文の学説を伝えるものと見ており、後に「封建的統一帝国」、すなわち秦の建立後、これらが『莊子』天地・天動・天運三篇に受けつがれて、管子四篇の有していた革命性が失われていく、との見通しを立てている。この両氏の論が発表されて以後、四篇の思想内容を「唯心主義」的と評する見解は、中国においてもあまり見られなくなった。

そして四篇に「唯物主義」的要素を見ることは、一九七四〜七六年に、「法家」の書として『管子』全書から断片的文辭を引用する風潮が盛んになる中で『管子』の思想性の「法家」性を主張する恰好の根拠となったのである。たとえば、洪城「試論先秦法家的戰備思想」^{I 36}上海市重機械製造公司工人歴史研究小組「黄老之学是維護封建統治的法家重要流派」^{I 38}等々では、「執其名、倖(謀)所以成」「持而滿之、乃其殆也」などの語をひいて、四篇の思想を「素朴唯物其主義」と名づけている。こういう姿勢で『管子』を評価することは、「四人幫」批判後に発表された鍾肇鵬「黄老帛書哲学思想」^{I 43}においても、馬王堆出土帛書の『称』が、物を第一性とし名を第二性とする唯物主義観点を示す書だと論ずるのにあたって、心術上篇の「物固有形、形固有名」との類似性を指摘していることなどを見れば、現在まで継承され続けているように見うけられる。

このような最近の論調における四篇の扱い方は、五〇年代から六〇代にかけての、独立した道家の一学派の遺説とみなしていた傾向を薄れさせ『管子』を全書的に評価しているようにもみえる。が、その内実は、『管子』全書を、『法家』最近では『黄老派』の文献であると性格規程した上で、その規定にあてはまる文辭のみをとりあげるといふものであり、託する学派こそ変われ、手法としては、胡適『中國哲學史大綱』の域を出でているものではない。

さて、日本における管子四篇の研究は、中国でのそれに注意を払いつつも、いささか異なった方向性を持っているようである。貝塚茂樹『諸子百家』^{I 24}のように、『四篇』宋尹遺著』説をいち早く採用して、宋鉞尹文の学説を講ずるものも無くはないが、概して劉節・郭沫若氏らの宋鉞尹文遺著説に対しては批判的であり、四篇自体の思想内容を、内在的な手がかりに拠ってまず吟味しようという態度で、研究が進められている。⁽⁵⁾

まず、赤塚忠氏の一連の論考は、注目すべき業績だといえる。氏の論考のう

ち「道家思想の原初の形態」^{I-19}は、専ら管子四篇の分析にあたったものでありこれのみを見れば、表Ⅱに分類すべき性質の論文である。しかしながら赤塚氏自身も述べているように、氏が「古代事実と弁証的思弁——莊子流の思弁論理の成立過程を中心として——」^{I-19a}以来の一連の論考で追求しているものは「道家思想の展開」なのであり、この論文のみを切り離して扱うわけにはいかないだろう。氏の構想の中で管子四篇は、次のように分類される。

心術上篇……古代信仰における「交神明」の体験をバネとして「自己否定による完全なるものへの飛躍」という実践法則を備えたひとつの思想を形成し、『老子』『莊子』に先行する、道家文献中最古の文献として出現した「原経」。「原経」を、君主が臣下を統御する心術に制限する方向で解説し演繹した「経」。「原経」を受けついで、「経」とは異なった「心術の虚」を強調する方向で「経」を解説した「解」。以上三段階が混在するが、うち「原経」は前四〜五世紀の交に成立。

心術下篇……心術上篇中の「静乃自得」「虚其欲、神將入舍」「物固有形、形固有名、名當謂之聖人」等を受け、新たに「專意一心」による「精氣」を主張し、さらに氣の概念、心の能動的な作用、養生説等について発展・創出しているもの。孟軻の主張などに影響され、前四世紀後半に成立。

白心篇……心術上篇の道の主張の展開を図って自然必然性を重視し、物の現実的存在に注目し、君主の和合を内容とする「應物」の説を唱えて内業篇の先声となる。墨家の影響によって前三〜四世紀の交に成立したものである。

内業篇……心術下篇に類似する陳述は多いが、道の強調・和の強調・主心の傾向が顕著なことなど、心術下篇とは異なった説をも含むので、心術下篇と正副の関係にあるものではなく、心術下篇の説を主とするが白心篇の説をも総合し、心術篇系統の諸概念を明確化組織化し、道の体得の極致を画くもの。荀況の影響を受けて前三世紀初期に成立。

赤塚氏による以上の分析は精密であり、殊に、心術下篇と内業篇の検討に際しての郭沫若批判には説得力がある。

また赤塚氏は、この「道家思想の原初の形態」の序論において、既成の道家思想研究のうち、とりわけ津田左右吉説に対して、「所謂上代思想史は自明的ではなく、寧ろ思想研究の帰結たるべきもの」だと発言し、また、津田氏、武

内義雄氏、および中国の諸氏による『老子』『莊子』の本文批判の論調総体に對し、

所与の原典内に依拠しているだけでは、その本文批判は、結局、分析・接合の技巧的問題となつて、悪くすると、実際には発展し尽したあとのものを初歩的なものとして想定して出発したり、その固有とは異なる展開過程を合理的なものとして押しつけたることになりかねない。

と述べている。この発言は、まさに思想史研究の範と仰ぐべきものであり、『管子』研究の現状に鑑みれば、そのまま先に紹介した中国における管子四篇研究に對する鋭い批判ともなっている。

赤塚氏は、かかる自説に法つて『老子』『莊子』さらに道家思想を研究してゆくために、道家思想の「発生的な原初形態」とその「展開過程ないしはその理由」の暗示として、管子四篇を採り上げているわけである。そこでは『管子』は、「漢代の編集ではあるが、それ以前の古説を含まないとは限らない」との評價される。また氏は、この論文の結びにあたる「第四 心術上篇以下四篇の性格」において、四篇各々の内容と構成を「道家的思弁の原初の形態から、時と共に次第に展開するさま」として要約した後、次のように述べる。

さて『管子』の中に何故に、また如何にして、これらの諸説が保存されていたのであろうか。或いは、それらは稷下の横議の遺説であつたかも知れないが、それを確証するものはまだ見出されていない。如何なる形態でか、戦国末から秦にかけて『管子』なる文献が存したことは確実であるが、それは法家の書であつた。前漢末には、劉向の編集を経て、ほぼ現存の形となつたが、それが如何に伝承されて来たものであつたかは明らかでない。『管子』の成立事情やその学術史上の性格はなお未解決の問題である。この点からすれば、以上の所論が妥当であるか否かはまだ十分に明白であるとはいえない仮設の域に止つている。

それにしても『管子』の成立事情などを早急に明白にすることが困難な現在では、心術系統の説が、他の『老子』『莊子』などの文献中で如何に展開しているかを検討することによつて、この仮設の確実度を高めることができるであろう。少くともここに得られた展開過程は、それらのうちにおける展開を明かにするのに、研究者の恣意による觀念相互の整合や系譜づけとは異

った、一層客観的なその基準を提供することになる。

ここに、『老子』『莊子』を、あるいは道家思想を研究するために『管子』の文辞を利用した者として、最も良心的な弁説のひとつを見ることが出来る。赤塚氏のこの言葉は、道家思想研究に限らず、およそ何ごとかを解明するにあたって『管子』を利用する日本の研究者の大部分が、自身でその論中にかかる発言をしているか否かを問わず、自己のとるべき態度として採用している立場をも、集約的に表示しているといえるだろう。曰く「稷下横議」、曰く「法家の書」あるいは「道家的傾向」、曰く「劉向の編集」、曰く「成立事情未解決」、曰く「目下のところ……」、曰く「当面は明確化困難」。日本においては、『管子』に言及している諸論考のうちすぐれたものならば、おおむねこの程度に『管子』の書誌学的取扱いに注意を払っており、中国における諸研究に比せば、総体としてより客観的・科学的な歴史論文を作成しようとする意向を窺うことは出来る。が、それは同時に、このようなあれこれを付言しておきさえすれば、論者の任意の所論において、中国における『管子』をめぐる諸論議のような「自明的な上代思想史」を機械的にあてはめる方法を排除し、しかもなお、必要な素材を『管子』から選びとることが、客観的科学的な論を展開してゆく上で妥当な態度として許容されている状況を示している。

とまれ赤塚氏の目的は、道家思想の展開を跡づけることに在るのであって、『管子』の解明にはない。氏はこの「道家思想の原初の形態」で提示した結論をもとに、『老子』『莊子』の諸篇について、管子四篇を時間軸に用い、着々と分析を開始している^{I-191b.e}。従って、氏の「仮設」の妥当性を検討することは、氏自身によって『管子』の研究者に委ねられたと受けとめるべきであろう。

『管子』の研究者であって、管子四篇の分析に言及した論者は、郭沫若氏を除けば、町田三郎氏ただ一人であると、私は考える。否、より卒直に云えば、管子四篇への言及の有無を問わず、『管子』の研究とみなしうる業績そのものが僅少なのである。表Ⅲには、前節にも述べたように、一応『管子』全書に対する配慮の窺われる論著をあげた。町田氏の諸論は、標題上は各篇・類の個別分析の形をとっているが、題名全てを見れば明らかなく、数多の論文の集積によって『管子』全書の解明をめざすものとみなしうるものであり、一括して一編として表Ⅲに入れた。郭沫若氏は『管子集校』の最終的編纂者として『管

子』全書の文辞に対し自説を明らかにする一方、表Ⅱにおさめた数篇の思想史的考察をも発表していることで、正しく『管子』の研究者の名に値することは云うまでもない。が、余の論考は後にふれるように、全書についての行論ではあつても、篇次の構成・成立事情の考察にのみ論及するものであつたり、『管子』書中の特定の思想傾向について略述するものであることが多い。小林昇氏の論は^{II-89}、氏自身が述べているように、津田左右吉説による中国古代思想史を『管子』にあてはめて論じたものであり、前述した津田説の体質をそのまま受けついでいる。妻良楽・汪淳^{III-85}・汪淳^{III-86}両氏の著は、博引傍証の大著ではあるが、ともに究極的には、『管子』書中に管仲の遺説を探らんとするものであり、関心の対象は現存『管子』にはない。

かかる状況において町田氏の一連の論は、現存『管子』の内在的な成立原理を本格的に追求した。おそらく唯一の業績であると思われる。氏によって現存『管子』全書に対する統一的な結論は未だ発表されていないが、当面、問題にしている管子四篇についても、氏は「管子四篇について」^{III-931h}「再び管子四篇について」^{III-931a}の二論文において、「現存『管子』書中にある四篇」という視座をすえた上での論述を展開している。町田氏において管子四篇と『管子』との関わりは、「再び管子四篇について」の末尾に、四篇における『老子』『莊子』に比してより現実的常識的な傾向を指摘した上で、次のように表現されている。

こうした思想としては未熟素朴でもあるが、生活に密着し即物的に現実の生に役立てようとする態度、たとえそれが通常矛盾背反するものであつたとしても、時にその効用が認められればそれを受け入れようとする思想のあり方、思えば四篇における道儒法その他鬼神養生論をも含んだ折衷的態度というものは、すなわち四篇のこうしたあり方は、実はそのまま四篇を内包する管子全書の一般的性格でもあつたのである。この限りでは四篇は、偶然に管子に紛れこんだものではない、あくまで管子の土壌を己れの養分として生育した思想だといわねばならない。

『管子』全書を通貫する思想を折衷的なものと規定するのは、「管子」の思想について——外言類を中心として——^{III-931e}等においても示されている町田氏独特の意味あいをもつ所説であるが、その発端は、『管子』をめぐる氏の一連の論考の最初である「管子四篇について」において、四篇の実践規範として、「中」

という概念を特に取り出したところにあった。特定の篇を分析しつつも、そこで得られた結果をその篇の内部にのみとどめず、全書について適用できるか否かを検討していく氏の手法は、対象が「雑駁なる書」とされている『管子』であるからこそ、一層有意義であると思われる。

しかしながら、仔細に氏の所説を検討していくと、町田氏の『管子』研究にも、やはりいくつかの問題点が存在している。先に引用した氏の行文にも示されているように、町田氏にとって、『管子』は、即自的には「諸思想を抱合してふくれあがった道家」と、とらえられ、『管子』の独自性とは、あくまで、道家・儒家・法家等々との比較において、顕在化させようものと考えられているのである。四篇の時間的編成過程を問題とする場合、町田氏は、金谷治氏の所説に依拠し、心術上篇の経と解との関係性を、漢初の老子の文献派が『老子』⁽⁶⁾に對した態度と、相応するものだとみなす。これを理由として心術上篇の成立をその派の手になると見る。更に他の三篇もそれに準ずるとして、結局管子四篇は、どれも、だいたい秦漢期に、老莊派と重なりつつも、ある程度の幅を有する思想集団の中で生まれたものだと評価するのである。

そこで、「管子の実践規範たる『中』」の創出は、道家思想の崩壊を意味するものと定義づけられる。ただし、氏は「中」を、『管子』の実践規範」とも評しながら、実は、主要には、白心篇を以て、その特徴ある「中」を論述した篇だとみなしており、「再び管子四篇について」では、「白心篇は道から離れてようやく別箇の規範『中』を創出する方向へと進む」とも述べて、白心篇の思想的晩熟性をも暗示しているのである。

すなわち、町田氏によって用意された『管子』独自の座位とは、あくまで道家の崩壊によって成り立ちうるものであるらしい。『漢書』芸文志に残る諸子百家分類法は、依然『管子』研究の大前提であり続けているようだ。もつとも、町田氏は、管子四篇に即してのみ、かかる形での道家との関係を明言しているものであり、この四篇を思想的頂点として、形而上の世界への関心を稀薄化し、それに代わる形而下の日常的実践規範の探求へと向うのが、『管子』全書としての方向だと見る。

さて、以上紹介してきた諸氏の説について、四篇相互の成立事情を時間的に図示すると、表VIが得られる。

表VI 管子四編の成立年代諸説

郭沫若 (杜国庠)	心術上 → 内業 → 白心 (心術下)	宋鉞 宋鉞学派 尹文 老子 孟子
劉節	心術上 → {心術下 内業 白心}	老子
馮友蘭	{心術上 心術下 内業}	白心 唯物主義的傾向の道家 接子
関鋒	{心術上 心術下 内業}	白心 『莊子』天地天運 唯物主義道家 尹文
赤塚忠	原経 経 心術上解 → 心術下 → 内業 白心	孟軻 荀況
町田三郎	経の古いもの → 経 → {心術上解 心術下 内業}	白心 戦国末道家 道家の崩壊

これらの結論は、各々、現行『管子』の心術上・心術下・白心・内業の各篇について、細かく文辞を分析した結果提示されているものであり、このような結論に依拠して、宋尹学派なり、道家思想なりの展開が歴史的に論じられているのである。すなわち諸氏が一樣に採っている手法は次のようなものである。各篇の特徴として、各々「道」「氣」「和」「或」等々の文字が採り出され、その内包する概念に思想的意味・位置付けが与えられて論述がなされる。その論述は、その文字を含む前後せいぜい数十字の文章を切り取っての考察にすぎない。それらの文字が示す概念相互は、先に与えた思想史の意味・位置付けによって時間系列の中に並べられる。その序列がただちに現行四篇成立の時間的序列を示すとみなされ、次には逆に、そこになりたった四篇の時間的配置をもととして、特徴ある文字を含む文章以外の部分の思想性についても、時間的展開のあとづけが論証される。かくて四篇を遺した一学派の展開の跡が描かれる。

つまり、異なる概念について論述されている二つ以上の篇がある時、それを、一書の中で主題を変化させて論を進めているのだとはみなさず、ただちに

執筆年代の前後関係を示すものと受けとられているのである。同時に、現存する四篇の文章について（心術上篇の経の部分とは別としても）、現存の形のみまでその論脈を跡づけてみるという作業はなされていない。従って四篇間のまとまりの指摘も、各篇から抽出した概念を結びつけることに於いて提示されているのであって、現行本の文脈の流れから論じられているのではない。

さて、四篇のまとまりについては、古来の指摘がある。その中でも有名な一文は、張嶠の「讀管子」であろう。これは、四庫全書所収の張嶠『紫微集』に収められている文であるが、『管子集校』が、現存最古板本と認定するいわゆる「宋楊忱本」及びその影印本・影刻本（いわゆる四部叢刊本と光緒五年張瑛影刻本）の末尾にも付されており、比較的流布している趙用賢本の昌頭「管子文評」にもその一部がひかれ、ここにとりあげた近代以降の諸氏の多くも、行論の中で、この文に言及している。この「讀管子」の中には次のような一文がある。

管子、天下之奇文也。所以著見於天下後世者、豈徒其功烈哉。及讀心術白心上下内業諸篇、則未嘗不廢而歎、益知其功業之所本。然後知世之知管子者殊淺也。

『紫微集』所収の文と、四部叢刊本、張瑛影刻本の間に、この部分の異同はない。そしてここには明確に「心術白心上下内業諸篇」と記されているのである。この文は、前述したように『管子』を問題とする者の間では著名な文であり、後人による引用も多い。王應麟『困學紀聞』は、

張巨山讀管子曰、讀心術白心上内業諸篇、知其功業之所本。然後知世子之知管子者殊淺也。

と刪節して引用し、黄震『日抄』は、

張巨山謂、其心術内業等篇、爲管氏功業之所本意。

と刪改している。また趙用賢本管子の「管子文評」では、刪節されているが、張嶠曰、管子天下奇文也。心術白心上下内業諸篇、是其功業所本。

と記され、ここにも「白心上下」の文字を見ることが出来る。なおこの「管子文評」は、戴望『管子校正』など近年の刊本においても、このままの形で見ることが出来る。

「宋楊忱本」以下現存諸板本の本文の篇次は、通行通り、心術上・心術下・

白心・内業の形をなしているが、文中の記載から、紹興己未（一一三九年）以降、ほど経ぬ頃の執筆になるこの「讀管子」に、「心術・白心上下・内業」とあることを、いかなる意味に解すべきであろうか。張嶠は「讀管子」中に『管子』本文中の字義について、いくつかの注意深い意見を提示しており、郭沫若氏などは、「宋楊忱本」が比較的善本となりえたのは張嶠の校訂を経たからであろうと推察しているほどである。「白心上下」が、単なる張嶠の書き誤まりとは思われない。張嶠以前の著述で、心術篇に上・下があることを明示する材料も見あたらないし、張嶠より下の時代の黄震・王應麟らの著述によっても、当時彼らの見た『管子』にあったのが、「心術上下」なのか「白心上下」なのかは定かでない。従って、張嶠の見た『管子』に白心上篇と白心下篇があったことは、充分考えられる。それが現行『管子』のどの部分にあたるかは、別に検討する必要があるといえよう。

このような事実を見る時、日中を問わず、諸氏の管子四篇をめぐる諸論考に對して、根本的な疑問を感じざるをえない。表VIに示したように、赤塚氏以外の論者は、白心篇を四篇中最も晩成の思想だと分析している。このように分析することができるのは、現本『管子』に雜纂性を見、それに依拠して『管子』中から四篇を切り取り、自己の所論に拠って配列し直したがゆえであろう。にもかかわらず、その基盤となっているのは、現行『管子』の篇次・篇目なのである。『管子』を疑いながら、その疑い方は、あまりに不徹底不注意ではないか。

虚心に「讀管子」の文と現行『管子』を眺めてみると、ほぼ次のようなことが想定できる。まず、現行心術上篇については、宋楊忱本・中都四子本等、現行『管子』諸板本に付されている尹知章注に

此已下、上章之解也。然非管氏之辭。豈有故作難書、而復從而解之。前修之制、皆不然矣。凡此書之解乃有數篇。版法・勢之屬、皆間錯不倫、處非其第。據此、則劉向編授之由曰謂爲管氏之辭、故使然也。今究尋文理、觀其體勢、一韓非之論、而韓有解老之篇。疑此解老之類也。

とある。従って、この尹知章注が執筆された年代においては、一篇のうちに経と解のある現行の形にほぼ類似した編成の篇だったと思われる。また「心術」という言葉も、四篇の中では、この現行心術上篇の「解」の部分の初めにのみ

用いられている。諸家の指摘する通り、現行心術上篇の冒頭、いわゆる経の部分は、明らかにいわゆる解の部分の執筆以前に成立していた文章であって、その存在を前提として「解」が執筆されている。現行心術上篇の作者は解の執筆者であり、題辭を付けるとすれば、別人の命名であつても、最終執筆者の意識とさしてかけはなれたものとはならないであろう。となれば、現行心術上篇が、かなり古くから（無論原初の『管子』編集時以降だが）心術篇という名を有していた可能性は、極めて高いと云えるだろう。

では現行心術下篇は、張嶠の見た『管子』においては、どのような形をとっていたであろうか。前にふれたように郭沫若氏が、劉向編集時の『管子』について篇数八十篇であつた可能性を指摘しているのは注目に値する。が、そのことは、ただちに心術下篇と内業篇の重複を意味しはすまい。赤塚氏も、内業篇に盛られた思想内容の多様さを根拠として、郭説を批判している。極めて表面的に、この二篇の文章形式を見ると、同じ師説を祖述した二種のテキストにしては、心術下篇に、「故曰」を冠した有韻の文が散在しているのに対し、内業篇には全く無いという差異が気になりとなる。叙述された思想内容の素材の発生系統ではなく、『管子』として編纂される時点での四篇の存在形態を考えると、「故曰」を冠した有韻の文を多く含み、現行本において心術下篇の次におかれている白心篇の方が、どちらが上でどちらが下であつたかはともかく、心術下篇とセットになつて、張嶠のいう白心上下篇を形づくつていた可能性の方が強いのではないか。この時点を考えて、心術下篇と白心篇との内容的差異を、時間的前後関係によつてことさらに規定していく必要性は感じられない。赤塚氏が分析されたように、白心篇が、心術上篇中の経の一部（「原経」）の系統をひき、しかも心術下篇と方向性を異にするものとみなしうるならばなおさらのことである。（内業篇が、心術・白心などを含む區言類にはなく短語類にあり、『漢書』芸文志儒家者流に「内業」十五篇があることも、直接的に何ごとかを語る資料とはなりえないものながら、記憶にとどめる必要はある。）

ここで、試みに、先にひいた尹知章注の文中に「版法・勢之屬、皆間錯不倫、處非其第」とあることを考慮してみよう。版法解は、現行『管子』中にあ

である。形勢解は存在しているのだから。が、念のため、短語類に収められた勢篇を見ると、そこに「故曰、無爲者帝、其此之謂矣」「故曰、修陽物之從、而道天地之常、羸羸縮縮、因而爲、死死生、因天地之形。天地之形、聖人成之」の二句を得ることが出来る。勢篇は極めて短い篇であり、「戰而懼水、此謂澹滅」「戰而懼險、此謂迷中」といった、兵法に関わるものらしい言葉で始まっているが、その中に「正静不爭、動作不貳、素質不留、與地同極」「大明之祖、可以代天下」といった文辭が散在している。これらを現行心術下篇の「鏡大清者、視乎大明。正静不失、日新其德、昭和天下、通於四理」とか、白心篇の「吾語若大明之極……」とかに比較して、その間の思想的展開を論じてみることは不可能ではない。更にあるいは、白心篇中に唐突に出現しているか

の如き文章であつて、諸氏が、白心篇の晩出性あるいは雜纂性を指摘する材料に用いている「兵之出、出於人。其人入、入於身。兵之勝、從於適、德之來、從於身。故曰、祥於鬼者、義於人。兵不義不可」の章句に注目し、白心篇と勢篇の間の錯簡なり、同一系統の「経文」の存在なりを疑うこととても可能だと思われる。

しかしながら、私は、現時点で張嶠「讀管子」の文のみを根拠として以上に仮に述べてきた様々な「可能性」をただちに論証しようとは思わな(い)。それは現在の時点では、実に不毛の技である。なぜならば、『管子』は現在全書的に、かような文辭篇目の錯綜を疑いうる状態にあるし、それ以上に、叙述されている概念の関連性や、用語の類似性を指摘しうる状態にあるからである。概念の関連性・用語の類似性は当然ではないか。『管子』は、とにもかくにも「一書」なのであるから。（文辭篇目の乱れは、現在までのところ、その整備にあまり力が注がれてこなかったからである。人或いは大著『管子集校』を以て、その整備作業の精華に数えるかもしれない。が、私の見るところ、『管子集校』にもまた多大な問題点が含まれている。このことについては次節に述べる。）にもかかわらず、多くの人々が、管子四篇について、そのまとまり・相关性を指摘し、更には篇毎の歴史的展開を跡づけることに精力を注ぐのは、心術・白心・内業という名の篇が、古来、まとまって道家色を指摘されて喧伝されてきたからでもあるが、より主要には、この四篇が『管子』中に存在することの内的必然性が、云い換えれば現行『管子』という書物が持つ統一的思想内容とその

位置が、ほとんど顧みられていないからである。現行『管子』中の心術上篇・心術下篇・白心篇・内業篇の素材となった文献は、あるいは諸氏の説のような経緯をたどって生み出されたものであったかもしれない。たとえば、赤塚氏が管子四篇を道家思想の原初的形態とその展開過程としてとらえたのは正しいのかもしれない。管子四篇の素材となった文献は、あるいは氏の云う「多元的な展開」をとげて『老子』や『荘子』に発展したかもしれない。が、現在存在しているその文献の最終的な展開結果は、他の何ものでもなく、『管子』の中の四つの篇という形をとっているのである。赤塚氏が四篇を道家思想の展開の跡と考えるならば、その「道家思想」は、現行『管子』を正統な帰着点として発展してきたものとなるはずであり、現行『管子』を導く必然性をもつものとして氏の「道家思想の展開」の研究がなされるべきではないか。たとえ『老子』や『荘子』に影響を及ぼしたとしても、四篇の側から見れば、それは「多元的な展開」の中の一つのわき道にすぎないはずである。四篇は、「道家思想」「宋尹学派」「黄老派の政治思想」といった呼称を要請しはしない。四篇を真に分析しようとするならば、まず、四篇を『管子』の中にもどし、『管子』全書を編纂した者の意識中における四篇の位置づけ、あるいはその意識と四篇との距離なり摩擦なりこそが、はかられるべきではないか。⁽¹⁰⁾四篇が『管子』という帰着点を持ったことについて、その内的意義を与えることなく、ただ稷下という地域性に依拠して説明を終えてしまうのは、思想史の頹廢であり、『荘子』天下篇や『漢書』芸文志に記された学派の呼称にその特質を預けてしまうのは、思想史の怠慢だ、と私は考える。

以上述べたことと同様のことは、『管子』中の他の篇の思想を扱った論考についても云えるのである。また、書中に見える、政治・経済・社会・農業等に関する諸事象の記述を、歴史資料として取り扱う場合、それらを記載し伝播した主体の姿が、すなわち『管子』全書の編纂の立場が全く明らかにされていない現状であることに關する論者の無意識性は、更に甚だしい。時に、とり扱う篇によっては、その篇の原執筆について、賈誼のグループ^{II-57}なり、桑弘羊の朋党^{I-90}なり、漢初の水利工事従事者^{II-65}が想定されることはある。となれば、表I-IIIにあげた論考の筆者が、いかなるフィルターがかけられた記録であるかを考慮することもなく、その記録から客観的歴史を構成することができると考え

るような歴史研究者であるとは、とうてい考えられない。にもかかわらず、『管子』の最終的編纂者の立場については、考慮の必要性すら感じられていないのである。

友于氏らによって発表されている『管子』中の農業的記載に関する一連の分析^{II-63, 66}などは、私にとって極めて魅力的である。対象が、現在も紛うかたなく存在している中国の大地であるがために、精力的な土壌の実地調査の成果を『管子』に投入する氏らの手法は、充分意義ある『管子』研究だとも考えうる。にもかかわらず、友于氏が「管子度地篇探微」^{II-65}において、度地篇の著作年代やその階級性と思想について、牧民・乗馬・権修等の篇と関連させ、さらに『商君書』をひいて、漢初における荀子再伝あるいは三四伝の弟子の手に成る著述だ、との結論を出しているのを見る時、やはり、『管子』全書の統一原理を措定することなくして、『管子』中のいかなる篇の分析も成立しえない、との私の考えは、更めることができないのである。

(三) 『管子集校』の功罪

表I-Vに採録した諸論考のうち、一九一九年から一九五五年までに発表されたものは、三十二種であり、このことから、一九五六年刊行の『管子集校』が、『管子』の研究史上有する多大な意義の一端を窺うことができるだろう。難解で錯綜した『管子』の文辞に対し、十七種の板本について異同を示し、四十二種の校釈書から適当な注解を選択して並べたこの書は、この書を手にする者が、各人の観点によって、手軽に『管子』の原文を校訂し、行論に有効な訓詁を探し出すことを可能にした。前節でとりあげたような諸論考も、多くこの書に依拠している。

『管子集校』は、關一多・許維遙・郭沫若三氏の共著の体裁をとってはいるが、業半ばにして倒れた關・許二氏の遺稿を整理し、最終的に完成させたのが、郭沫若氏と彼を助けた当時の若手研究者であったことは、「管子集校叙録」「校畢書後」から知りうる。この書の完成と、前述した郭氏の個別論考を併せ考える時、『管子』の研究者としての郭沫若氏の功績は至大であるといえようが、また、しかるがゆえにこそ、郭氏の『管子』研究、とりわけ『管子集校』に内包されている問題点は慎重に検討する必要性をもっているのである。

『管子集校』の編集形態を見てみると、校釈の集成たる本書としては、ある程度やむを得ないことかもしれないが、また、他書の集積本にも往々例のあることだが論議の集中している本文の語句を抜き出した上、それに関して編者郭氏が採録に意義を認めた校釈のみが並列的に紹介される、という形をとっている。校釈文の取舍は、本文の文字校訂に資するか否かを基準としてなされたようであり、内容解釈に渉る言及は、本文の同一箇所に關する同一人の発言であっても刪節されている。上原淳道氏らも「管子集校叙録」中の記述を紹介するという形で指摘しているが、『管子集校』の素材となった聞一多氏の草稿は、別に正文を刊行する用意のもとに作られたものであり、許維遜氏の草稿は『管子』全書の原文に通体施注を企図したものであったという。郭沫若氏が『管子集校』において校釈諸説の部分的抜粹形式を採ったのは、「一般読者のためではなく、研究活動に従事する者の瀕祭に便ならしむるためであるから、原文を附刊したり、随文施注の形式をとらなくとも、さしつかえないだろう」との判断によるものである。

このようなスタイルで『管子集校』が世に出たことにより、郭氏の意図通り、『管子』本文を読むとする者は、「群書に散見して見難かつた前人の少なからぬ功力」を一望できるようになった。その結果、『管子集校』刊行後発表される『管子』をめぐる諸論文に、『管子集校』所引の字義校訂説の中から、任意の説を選びとり、『管子集校』に引く某の説に據る」と付言するのみで、自説に適當な『管子』原文を作成する傾向を生ぜしめるようになったのである。この傾向は、『管子』研究の幅を広げるのに役立っているが、反面、その字義校釈説が、校釈者の原著においてどのような位置を占めているか、どのような『管子』観のもとに、どのように原文の流れを理解して提起された校訂説であるかを看過していることにもなるのである。これは、『管子集校』もたらした第一の問題点だと云えるだろう。

具体例を、前節で紹介した、管子四篇に關する諸研究にとってみよう。現行心術上篇の、いわゆる経の部分に、

(A) 直人之言、不義不顧、不出於口、不見於色、四海之人、又孰知其則。天曰虛、地曰靜、乃不伐。(B) 潔其言、開其門、去私毋言、神明若存。(C) 紛乎其若亂、靜之而自治、強不能徧立、智不能盡謀。

という条りがある。これに相応するいわゆる解の部分は、(D) 莫人、言至也。不宜、言應也。應也者非吾所設、故能無宜也。不顧、言因也。因也者、非吾所顧、故無顧也。不出於口、不見於色、言無形也。四海之人、孰知其則、言深圍也。天之道虛、地之道靜、虛則不屈、靜則不變、變則無過、故曰不伐。(E) 潔其宮、闕其門、宮者、謂心也。心也者、智之舍也。故曰宮。潔之者、去好過也。門者、謂耳目也、耳目者、所以聞見也。というものである。

この経文のうち(A)の部分については、前節で紹介した管子四篇をめぐる諸論考の中で、中国の論者によるものには、殆ど言及が見られない。解の文についても、(D)の文に触れるものはなく、類似の内容を含む記述としては、解の末尾近くにある、

(F) 其應非所設也。其動非所取也。此言因也。因也者、舍己而以物、爲法者也、感而後應、非所設也。緣理而動、非所取也。

が、専ら引用されているのである。ところが、赤塚忠氏が提示した「原経」と、町田三郎氏が赤塚氏に反論して掲げた「経の中の古い部分」との双方に、ここに挙げた(A)、(B)が含まれている。

これは、管子四篇に限って、その現存形態そのものを、宋尹学派なり先秦道家の一派なりの一遺説として価値を認め、その意義を古代史の局面に援用していくことの方に力を注ぐ中国での研究方向と、四篇の思想内容の分析から更に進めてその内部的成立過程を時間的に明確化しようとする日本での研究方向との差異に由るのである。四篇の現存形態こそを問題とするならば、類似の用語・主題について、同一篇の中により詳細な意識構造を示す文章があれば、それによって、四篇全体に向かう視座を設定するのも当然であるが、それによって、経(A)解(D)の文は等閑視される。一方四篇中の新旧を分別していろいろと試みる赤塚氏・町田氏にとっては、解(F)はより新しい思想を示すものとの判断から、当面関心の外に置かれることになる。

さて、赤塚氏・町田氏は、このような問題意識のもとに、(A)・(B)の文をとりあげるのであるが、文辭紛亂する『管子』をとり扱う者の常として、まず、字句校訂を施している。

はじめに、両氏とも冒頭の「直人」を「真人」に改めている。町田氏におい

ては、この(A)・(B)の文の字句改訂について、誰の説に拠ったかが、全く明記されていない。が、氏の一連の論考における字句改訂の註記を見ると、すべて「某の説に據る。『管子集校』何頁」との形式をとっている。ここでも、『管子集校』所引の誰かの校訂に拠ったのである。赤塚氏は、氏の校訂の原則を、

「以下心術上・下、白心・内業篇の本文校定は、原則として『管子集校』の説に従うが、その校定に疑問のあるものは原文(四部叢刊本による)のままとする。一々注記しない。」と表明している。

『管子集校』において、経(A)冒頭部は、「直人之言不義不顧」と楊忱本通り標記されているが、そこに、猪飼彦博・王念孫・張佩綸・章炳麟・郭沫若の説を並記している。「直人——真人」に関連しては、

猪飼彦博云、「直」当作「真」。

王念孫云、「直人」當爲「真人」、説見下解。

とある。赤塚氏・町田氏の校訂は、この二説によるものと一応受けとりうる。

次に解(D)の「真人、言至也。不宜言應也、」の句については、『管子集校』では「真」字を「真」字に改めて標記している。これは、この部分の郭沫若説として、

沫若案、王説「直人」、「真人」均「真人」之説、是也。「至」下當奪「人」字、即「真人、言至人也」。

とあるのを見れば、王念孫の説によって校訂が決定されたと考えられる(この部分に、聞・許二氏の説はない)。この部分に引用する王念孫説とは、

王念孫云、此釋上文「真人之言、不義不顧」也。(上文「真人」譌作「直人」)。「真人」當爲「真人」、隸書「真」字作「真」、「莫」字作「真」、二形相似。……中略……上文作「直人」、「此文作「真人」、故知其皆「真人」之譌也。「言至也」三字、語意未明、疑有脫誤、「宜」與「義」古字通、「不宜」

即上文之「不義」也。義者、度也。(説見經義述聞。左傳「婦義事也」、及國語「比義」下。)言事至而後應之、不先爲量度也、故曰「不宜言應也。應也者、非吾所設、故能無宜也」。尹不知「莫」爲「真」之譌、又不知「不宜」即上文之「不義」、遂讀「真人言」爲句、「不宜言」爲句、而強爲之説矣。

というものである。

『讀書雜記』を見てみると、確かにこれと同文が記されているが、この校釈は、解(D)の「故能無宜也」までの句に即して述べられているのである。すなわち、経(A)の「直人之言、不義不顧」についての専述はなく、この解(D)の校訂文中に付随して言及されているのであり、『管子集校』が経(A)の当該箇所、先に紹介した形で、この王念孫の校釈を重出させているのは、読者の便宜を慮つての配慮なのである。

次に、経(A)「不義不顧」を、赤塚氏は「不俄不側」と校訂する。これについて氏は、

原文には「不義不顧」に作るが、張佩綸氏の説(『集校』所引)により改め

と注記している。また「乃不伐」を「乃不忒」と校訂しているが、これについての注記はない。町田三郎氏は、「不義不顧」を「不俄不傾」に改め、「乃不伐」を「乃不貸」に改めている。ここでも、校訂についての論拠は示されていない。そこで『管子集校』を見てみると、先の「直人之言不義不顧」の条にひかれた章炳麟の説に、

章炳麟云、此即後世所謂「不偏不倚」「發而中節」之意。「義」與「顧」意相近。「義」借爲俄。詩賓之初筵箋「俄、傾貌」。廣雅釋詁「俄、衰也」。説文「顧、環視也」、環視者必傾邪其目以眇睨。凡傾邪者必有所偏倚。吾心既無所設、無所爲、則無偏倚於一物。有感者則應之、因之而已、初非偏倚于此迹也。不必如雜志以「直」爲「真」之誤。

とある。町田氏は解(A)の文の訳解として、

真人の言は「不俄不傾」突飛なものではないが故に、人の耳目をひくことはない。従つて世人はその真理性に気づかずにいる。「人に遠いもの」ではない道、当然の真理のゆえに、かえつて人目をひかない、ということである。

と述べているが、この「人の耳目をひかない」という解釈は、章炳麟説の「環視」の訳語として採用されているらしく、「俄」字と「傾」字の採用も、章説によるものと思われる。

ところが、この章炳麟説の末尾には「不必如雜記以「直」爲「真」之誤。」とある。この章説の根拠は、『集校』の「直人之言不義不顧」の条だけからは

明らかではないが、解(D)「真人言至也不宜言應也」の条にひく章炳麟説をみると、

章炳麟云、兪先生説是也。「宜」、亦借爲「俄」。(説詳上「直人之言不義不顧」下。)

とあり、王念孫説「直||眞」を否定する根拠は兪樾の説に拠るものであるらしいことがわかる。このような形態で『管子集校』において二ヶ所に分載されている章炳麟説は、『管子餘義』では、経(A)「直人之言不義不顧」の条に

麟謹案、下文自解之曰、真人言至也不宜言應也。應也者、非吾所設。故能無宜也。不顧言因也。因也者、非吾所顧、故無顧也。兪先生曰、不宜即不義。莫乃直之誤。至乃正之誤。所顧乃所取之誤。下文所設與所取對。此亦當同。廣雅釋詁取爲也。故尹注曰、非吾所爲。先生説是也。此即後也所不偏不倚、……(以下『集校』「直人之言不義不顧」の条所引に同じ)

との形で記されているものである。すなわち章炳麟説は兪樾の説を基礎として展開させたものであることは、ただちに読みとりうるが、ここに章炳麟がひく兪樾の説は、『諸子平議』及び『管子集校』において、解(D)の「真人、言至也」の条に

樾謹按、此云真人言至也。下云不宜言應也。又云不顧言因也。皆釋上文直人之言不義不顧之義。不宜即不義也。然則真人乃直人之誤。疑管子原文本作直人言正也。蓋以正釋直。禮記曲禮篇、直而勿有、郊特牲篇、直祭祝於主。鄭注並曰、直正也。以正釋直、乃古義也。直與莫、正與至、皆以形近而誤。

とあり、「因也者、非吾所顧、故無顧也。」の条に、

樾謹按、非吾所顧、當作非吾所取。此與上文應也者、非吾動設、相對成文。下文云、其應非所設也。其動非所取也。又云、感而後應、非所設也、緣理而動、非所顧也。並以所設所取對言。故知此文亦當作所取也。廣雅釋詁、取、爲也。尹氏作注時、文尙未誤。故釋其義曰、非吾所爲故無顧、以爲訓取、正本廣雅義。或據尹注、謂正文亦當作爲。則是尹氏空舉正文、無所訓詁、無爲貴注矣。

とあるものから、各々抜き出して引用しているものである。

以上、諸家の校訂の原型を見てみると、章炳麟および兪樾の説は、王念孫の

「真人・真人→真人」の校訂に反対して展開されていることと、王・兪・章各説とも、解(D)の文における「応」や「因」の概念を手がかりとして、経(A)の「義」「顧」の校訂を試みたのであることが看取されよう。

兪・章の説に共通するのは、「真人」の言が「正」であるとの読み取りであり、「言至也」の三字を「未解」とする王念孫への批判である。ただし、兪樾は、その「真人」の「正」のあり方を、「義」字の意義に結びつけて解しており、また解(F)の文を手がかりとして「顧」を「取」の誤まりとみなしている。そして、その「所顧||所取」の内容も、解(F)の「緣理而動、非所取也」によって解されている。つまり「顧||取」することがないのは、「理に縁っている」からだと解釈しているのであり、「真人」の言が「正」であるというその「正」も、「理に縁る」ことを内容としているのである。すなわち兪樾において「義」字は、その通常義通りに解されており、経(A)の文を「真人の言は、義でなければ取らない」という意味に読み取っているのである。

これに対し章炳麟は、字義訓詁の一部について兪説を利用しているものの、独自に「義||俄」の仮借を主張することによって「真人の言は俄でも顧でもない」と、兪樾の理解とは文脈を読み更えているのである。が、章炳麟の云う「環視」は、決して「環」すなわち周囲が「視」ることではなく、「環」すなわち周囲をぐるりと「視」ることの意である。(熟語としての環視には両義がある)すなわち章炳麟は、「真人」が、その眼を傾けて右顧左眄しないのは、「吾が心の中に、何のかたよりも有してはいないからだ」と、読み取っているのである。

いかなる字句校訂といえども訓詁の羅列・仮借の例示の背後に校訂者自身の思想を基盤とする原文理解があつてこそはじめて成立しているのである。その結果である字義校訂の説を、虫喰い算に数字をあてはめるように用いて、原文の「科学的」理解が成り立つものだろうか。

章炳麟の「義||俄」「顧||環視||傾邪其目」の説は、あくまでも、後の解の文にもとづく「言正」なる「真人」を原イメージとして設定して述べられているのである。にもかかわらず、町田氏が、この章炳麟説を、単に恰好の訓詁としてのみ断章取義的に利用し(この章説における「環視」の読み誤まりは論外としても)、しかもなお、章説が反対している「真人||真人」の王念孫説にも

依拠して経文を校訂する時、心術上篇の成立過程を分析する、という、町田氏の所期の目的は、その根底において放棄されているに等しいと云えるのではないか。

同様のことは、赤塚忠氏の説にもあてはまる。先にふれたように、赤塚氏は、この部分の字義校訂を、一貫して張佩綸説に負っている。張佩綸説は『管子集校』において、解(A)の「直人之言不義不顧」の条に、

張佩綸云、「顧」當作「側」、字之誤也、側與色、則、貳爲韻、「義」讀爲「俄」、言無反無側也。

とあり、解「莫人言至也不宜言應也」の条に

張佩綸云、「王」訓義爲度、則「下文」「故能無宜也」爲「故能無度也」、殆不可通。「無義」當作「無俄」、「無顧」當作「無側」。

とひかかれている。張説も、王念孫の「義」度」の解釈を批判することを主眼としているが、「直人」「莫人」についてどう解しているかは、この『集校』所引の部分からは明らかでない。が、張佩綸『管子學』の解(D)の条には、『集校』所引の文のあとに、

呂氏春秋審分覽、莫人不能全乃備能也。亦真人誤爲莫人。

と付記されている。『呂氏春秋』におけるこの文の前後は、

大明不小事、假乃理事也、夫其不假也。莫人不能、全乃備能也、夫其不全也、是故於全乎去能、於假乎去事、於知乎去幾。所知者妙至。

というものであるが、張佩綸が「先め量度すること」なき「真人」という王念孫の説を、「通ずべからず」として排して提示した「不俄不側」なる「真人」は、『呂氏春秋』における、「小事」にかかわりあわない「大明」に相応する、絶対的存在としての全能なる「真人」なのである。

「乃不伐」の句も、『管子集校』は俞樾の説に依って「貸」に校訂しているが、赤塚氏は張佩綸の所論によって「忒」に作る。張佩綸の説は『管子學』では、

俞樾云、伐乃貸之誤。伐當作忒。周易豫象傳曰、天地以順動、故日月不過而四時不忒。

というものであり、俞樾の「伐」貸」の校訂に対して「忒」字を主張しているのである。『管子集校』には、この「俞樾曰、伐乃貸之誤」を省いて引いてい

る。俞樾の説は、

俞樾曰、「伐」乃「貸」字之誤、「貸」字闕壞、止存上半之「代」、因誤爲

「伐」矣。據下解曰「天之道虛、地之道靜、虛則不屈、靜則不變、不變則無過、故曰不伐」、以「無過」釋「不伐」、則「不伐」是「不貸」之誤、明矣。

禮記月令篇「宿離不貸」、鄭注曰「不得過差也」、是「貸」之義爲「過差」。

周易豫象傳曰「天地以順動、故日月不過、而四時不忒」、「忒」與「貸」同、

「日月」曰「不過」、「四時」曰「不忒」、文異而義不殊。然則此文言「不貸」、

而後解言「無過」、正合古義。且言天地者、當美其不差貸、不當言不伐。天

地之大、誰能伐之乎。於義求之、既不可通、「貸」字與上文「色」字「則」

字爲韻、今誤作「伐」、則於韻求之、又不合矣。是不可不正也。

というものであり、『諸子平議』と『集校』は同文。『集校』により括弧を付す。同じ『易』の文に注目はしているのである。すなわち俞樾も、この『易』

の言と、心術上篇の経の文と同義とみなし、内容的には「忒」字によって解

釈しているのだが、校訂の作業にあたっては、「伐」字に作られていることの

物理的理由をまず考え、「忒」字の内容をもちうる文字であって、「伐」字に作

られる可能性を有する文字として「貸」字の壊だとの結論を出しているの

である。これに対し、張佩綸は、内容解釈を先行させて、俞樾の説の中から『易』

に依る「忒」字を探り、自己の『管子』観により適応するよう「伐」を「忒」

に校訂してしまっているのである。

このような背景をもつのが、張佩綸の字義校訂「不俄不側」なのであるが、赤塚氏は、これを利用して心術上篇を校訂し、「原経」を復原したと主張しているわけである。

なお赤塚氏は「古代の信仰体験と道家の思弁法」においては「不義不顧」について、章炳麟説をとり「不俄不傾」と校定していたのであるが、「道家思想の原初の形態」では、このように張佩綸説を採っており、「天曰虚、地曰静、乃不忒」の句も、前の「真人之言」以下の文章とは別の一段だと解していたのを改めて「真人」にかかわる句だとみなし、

されば、真人の言はよこしまもかたよりもない。口にも色にも表わさないの
で、世の常の人にはその法則を知り得ないが、天の虚しき道・地の静なる道
を体得しているので誤りを犯すことはないのだ。

との訳文が提示されている。つまり「不忒」の主語を「真人」と解し直したことが明示されている。(文義解釈の変更理由については明らかにされていない。)

赤塚氏の大胆な提案である、「道家思想」の原初の形態を示すとの「原経」が、『易』はともかく、『呂氏春秋』の先の文に裏づけられた張佩綸の「真人」観に基づく字義校訂に導かれて提示されていることを奇異に感じるのは、私の僻見であろうか。

以上述べたような、古来の訓詁の学の成果をその字義校訂の結果のみつまみ取って利用する態度は、赤塚氏・町田氏に限らず、『管子』に関連する近年の研究のほとんどすべてに見られる傾向である。時には、同一の文章中の二字を校訂するのに、相反する二家の説から一字ずつ採ることさえ見られる。考証学の「客観主義的科学性」が、当今の歴史研究者によって、それほど信奉されているのであろうか。対象とする書物の全体的性格が、ある程度明らかになっている場合は、その文中の一、二字の採否にあたって、その書物の有する基本的な方向を基準に用い、諸説の中から適当な文字を選びとることも可能であろう。しかし、現存『管子』は、まさにこれから、その性質を明らかにせねばならない書物である。字義校釈に投影されている校釈者の意識の微妙な差異さえ、その本文理解に重要な影響を及ぼしかねない状況だといえる。にもかかわらず、たとえば関鋒「論宋尹学派」に、

這四篇文字錯亂極多、本文引用多据『管子集校』、除个别出于己見之校改注明者外、余均不一一注明出處、

といった注記を見る時、あまりにも『管子集校』に依拠しすぎている日中の『管子』研究状況に不安を感じざるをえない。このような状況は、いわば『管子集校』の読者に非があるのであって、『管子集校』自体に罪はないとの意見があるかもしれない。しかしながら、先に述べたように、『管子集校』所引の諸家の説が、かなりの刪節・分截を施されており、『管子集校』のみ拠っていては、その校釈者の字義解釈の持つ意味を把握しきれない状態であるのは、『管子集校』自体の編集方針の結果である。校訂後の原文を全文示さず、著作としての文章の流れを明らかにする必要を認めない郭氏の『管子』への態度は、そのまま、諸家の校釈の引用のしかたにも反映されているといえるのである。

『管子集校』は、まさしく、『管子』を分断して古代史の材料にすれば事足りる、という郭氏の『管子』観を反映した、これまたひとつの癡祭なのであり、いわば、あくまで郭氏の個人的な作品にすぎないのである。

次に、校訂の基礎となる『管子』の諸板本と、旧注に対する『管子集校』の扱いを考えてみよう。ここに、『管子集校』のもつ、第二の問題点が存在している。

郭氏が「管子集校叙録」において、現北京図書館蔵のいわゆる「宋楊忱本」を、そこに付す「楊忱序」の紀年「大宋甲申」によって一七八四年刊行の板本とみなしたことの誤まりについては、既に王欣夫氏が詳しく指摘している。王欣夫氏は、楊忱が北宋慶曆年間の人であることを明示し、「宋楊忱本」については、書中の諱と刻工の姓名によって、紹興年間に両浙地方で刻された板本であり、正確には「紹興浙刻本」と称すべきであると述べている。王氏はまた、『管子補注』の筆者劉績の年代比定に関連して、郭沫若氏が「宋楊忱本」「陸貽典校劉績補注本」について不可欠の底本としている「中都四子本」を、論拠とするに足らない明末の書帕本であると断じている。この王説の是非については、後に論じたいが、少なくとも『管子集校』における郭氏の『管子』板本の鑑定が、必ずしも全幅の信頼を置きうるものでないことは確かであろう。

さらに『管子』の旧注の取り扱いについては、一層の問題がある。『管子』の旧注は、『新唐書』芸文志及び『宋史』芸文志に見える「尹知章注」だとされている。それがいつの頃からか「房玄齡註」の名のもとに通行されるようになった、と見るのが近年ではほぼ定説になっており、事実「宋楊忱本」以下旧刻諸本に付された注は「房玄齡註」と刻されている。この注に対しては、晁公武『群齋讀書志』以来、その「淺陋」であることを非難する者が絶えない。たしかに牽強附会の字義解釈だと感ぜざるをえない説も散在している。

しかしながら、このような旧注を非とする考証家自身が、『管子』原文の校訂にあたって、この「尹知章注」を利用することも、またしばしば行われてきている。先に引いた心術上篇の解(D)における「因也者、非吾所顧、故無顧也」には、「宋楊忱本」「趙用賢本」などには、

因、舊也。非吾所爲、故無顧。

という「房玄齡注」が付されている。これを原文の字義校訂に利用し、「顧」

字はもと「取」字に作っていたから、尹知章が「取」を「爲」と訓じたのだ、と述べたのが、先に引用した俞樾の説であった。郭沫若氏も、この俞説を是としてゐる。このように「尹知章注」を手がかりとして原文を校訂する例は、枚挙に暇がない。

ところが、この句に付された「房玄齡注」を称するものは、この一条のみではない。万曆五年刊行の、いわゆる「中都四子本」にはこの「宋楊忱本」系統の諸本に見られる「尹知章注」をも載せているが、その後、

●此節解上文不義不顧也。人莫言、至也。道至於人、莫能言、乃爲至也。不
宜、即上不義。言人心不先裁制其事、物來順應也。故曰非吾所設。言不預設
也。不顧者、因物而動。非吾所顧慮也。

との註文がある。郭沫若氏は、この中都四子本に●の印を付して記されている説を、「参補者・張登雲」の自説だと解している⁽¹⁵⁾。しかしながら、中都四子本『管子』に付された、郭子章の「管子題辭」を見すれば、そうではないことは、ただちに明らかになる。すなわち『中都四子集』刊行を企図した、朱東光・郭子章・張登雲らは、その四子の旧注を搜集したのであるが、『管子』については「房氏注」と称するものにも異本があり、郭子章がかつて建寧府において見た「房氏注」とは異なるものを、博士王生から手に入れることができたのである。この博士王生から得た「房氏注」にもとづいて、張登雲が参補の部分で執筆したのである。このことは、注文について、「宋楊忱本」系統の諸本と、「中都四子本」とを比べてゆけば、ただちに確かめられる。すなわち、「中都四子本」で「房氏注」の扱いを受けている註文が「宋楊忱本」系統にはなく、「宋楊忱本」系統の「尹知章注」が、「中都四子本」に「参補」として録されているケースが存在するからである。

王欣夫氏は「中都四子本」を「いわゆる明末の書帙本であつて価値がない」と断じているが、たとえその原文については信賴の置ける刻本でないとしても、現行「宋楊忱本」系統の諸刻に失なわれている旧注が録されていることだけを以てしても、「中都四子本」は充分注意を払うべき板本だと思われる。また、王欣夫氏は、汪遠孫『借聞隨筆』に拠つて、弟子職篇には唐初に単行注本があつたはずだと述べており、陸心源『皕宋樓藏書志』に録された『管子』の中に「元刊細字本、撰人無考」なる一本があることに拠つて、尹知章・劉績以

外の施注者が存在したことを指摘している。

『管子』旧注について、このように未整理の状態であるにもかかわらず、『管子集校』には、諸刻本間の註文の異同については、全く考慮が払われていない。註文の異同は、ゆくえの知れない「元刊細字本」を待たずとも、郭氏が必携と認める「宋楊忱本」「中都四子本」「趙用賢本」「花齋本」等の間にも存在しているのである。郭沫若氏が「管子集校叙録」で発表した「劉績遼人」説については、すでに王欣夫氏・羅繼祖氏⁽¹⁶⁾によって反論が出されているが、このような年代比定論議の基礎たるべき劉績補注の註文そのものと「尹知章注」との混乱状態についても、『管子集校』は何の注意をも払っていない。

旧注は、いかにその注釈の態度が浅陋であろうとも、当時通行の原文の姿を反映していることは確かである。原文校訂に際して、第一の資料とすべきことは、云うまでもない。が、『管子』旧注の如く、複数の註文が未整理で存在する以上、まずその諸注間の混乱を整備して後、原文校訂に利用すべきではないだろうか。

『管子集校』は、『管子』研究史上、確かに有数の功績を持つ書である。しかしながら以上に指摘してきたような、この書の持つ基本的欠陥を、決して看過すべきではない。まして『管子集校』のかかる不完全な字句校訂にのみ依拠して、安易に『管子』原文の校訂を行うようなことがあれば、『管子』の実像を形づくることは、遂に不可能になると思われるのである。

(四) 『管子』研究の当面の課題

では、現状において、いったい、いかなる方法によって『管子』の研究を進めてゆくべきであろうか。

『管子』全書について、より古い、より正確なテキストを得ることが、最も望ましいのは、云うまでもない。後代のものであつても、未知の系統の刻本を発見することは重要であろう。殊に、王欣夫氏の指摘する「元刊細字本」の場合、『皕宋樓藏書志』には、確かに記されているが、現在静嘉堂文庫には存在しておらず、既に大正六年刊行の『静嘉堂秘籍志』において、

案志(皕宋樓藏書志)又有元刊細字本。明成化刊劉績補注本。今佚。

とある。この紛失の経緯をつきとめ、できれば発見することは、日本在住研究

者の責務であろう。が、このようなことは、物理的条件の偶然の整備に待たねばならない。

また、より古いテキスト、と云つても、それが『管子』となつていゝのでなければ無意味であろう。昨今の中国における発掘によつて、現行『管子』に類似した文章を含む『春秋事語』『王兵篇』などの帛書・竹簡が出現している。

これらの概要を報じた論考からは、かかる竹簡帛書による『管子』校訂が企図されている様子も窺われる。そのような作業が行われれば、無論、古代思想史を豊かにするには資そう。しかし現本『管子』の成立事情が明らかにされないまま、その『管子』の素材であるかもしれないかかる出土物によつて、現行『管子』の文辭が安易に移刻されれば、『管子』の実態が、遂に雲散霧消する可能性も存在している。

となれば、現時点において取りうる方法とは、何であろうか。

まず、『管子』の原文を復原する手段には、次の二種類が考えられる。

第一は、前節で述べた、諸注の整備である。少なくとも、現在眼にしうるものについてだけでも、その系統の分別を行ない、それぞれの系統について、どのようなテキストに拠つて施された注であるかを考察していく必要がある。

第二は、部分的には既に諸考証家によつて試みられていることながら、唐宋時代の他書に引かれた『管子』の文辭について整理していくことである。先に述べたように、張嶠「讀管子」によつて、南宋紹興年間に至つてもなお、現存『管子』と当時の通行本との間に差異があり、『管子』が変貌し続けていたことが明らかな以上、この作業は不可欠であろう。先の出土物の場合とは反対に、一九七七年刊行の葉適『習学記言』（中華書局）に見られるような、現存『管子』の文辭を以て、宋代文献たる『習学記言』を校訂するような行為を断じて許容すべきではない。かかる行為は、『管子』究明の最も有効な手がかりを喪失させてしまうことになる。

次に、このような原文復原への努力と並行して、『管子』の統一原理を措定していくべきであろう。たとえ、時々刻々に、その内容が変化せざるをえないとしても、本来、これなくしては、原文の字義校訂もなしえないはずである。とはいえ、確かに、ただちに『管子』の統一原理を抽出するのは、かなり困難な課題であるといえよう。

ここで、第一の手がかりとなすべき素材は解類ではあるまいか。郭沫若氏が述べるように、劉向編纂時、解類が本文に付されていたか否かも検討すべき課題ではあるが、解類は現存『管子』を構成する素材の中で最も新しく成立したとみなしうるもののひとつであり、何よりも、そこには『管子』を祖述しようとする意志がある。解類の持つ思想内容を措定して、他篇との距離をはかる尺度とすることは、『管子』によつて『管子』を解明する、最も正統的な方法だと考えられる。

また、私が以上に紹介してきた近代の『管子』研究は、『管子』を疑うことを出発点としているが、そう扱われるような難駁な書でありながら、二千年を経て『管子』が今日存在しているのは、それに、伝える価値を見出し、伝える意志を持った人間が存在したからであろう。彼らが、『管子』に見た何物かは、個々別々ではあつても『管子』統一原理の一面を反映するものではないだろうか。彼らの『管子』への態度は、「信仰」から、「とりあえずの容認」まで程度の差はあつたかもしれないが、その理由となつたのは、『管子』中にある何らかの価値の認識であつただろう。それらを集大成していく時、そこに『管子』の統一原理に関する何らかの手がかりが浮かび上がると考えられる。

私は、このような見通しのもとに、今後の研究を進め、『管子』の原初的形態と、その統一原理を明らかにするための一歩としたいと考えるのである。

(一九七八、六、二二)

追記

以上の文を記してから、六年の歳月が流れ去ろうとしている。

執筆時点で、最優先の課題と考へていたのは、実は以上に記したこと他に、『管子集校』に、北京図書館蔵と明記されている「宋楊忱本」を、この眼で見ることであつた。かような文章を発表するには、それが最低条件である、と考える程度の良心は有していたつもりである。

様々な経緯の後、一九七八年十一月、北京図書館に在職されているB氏から、「宋楊忱本」の複写は、相応の代価により送りうる旨の書信を受け取り、また来館すれば閲覧できるとの知らせもあつた。どのような代価が必要であるかを問い合わせる一方、訪中の機会を待った。一九八〇年八月、北京を訪れうることにになり、再度私は、訪問して「宋楊忱本」と「陸貽典校劉績補注本」を閲覧したい旨の手紙を書き送った。返事を受け取りえないまま

また、九月九日北京図書館を訪れた私は、応待された丁氏より、「宋楊忱本」はここにはない、「劉績補注本」はあるが、現在整理中で見られない旨、伝えられた。なんとか、後日にマイクロフィルムを送ってもらえないかと依頼すると、可能だと云う。が、帰国した私は、一九八一年二月、「宋楊忱本」は所在不明となり、「陸貽典校劉績補注本」のマイクロフィルムは国外に送れない、再度来館して閲覧されたし、との丁氏の書簡を受けとった。

所在不明!! 郭沫若氏が『管子集校』の冒頭に、世界最古の完本としてその存在を明記された善本中の善本が……。

その後も、北京を長期訪問する予定の知人何人かに調査を依頼したが、結果は同様であった。

この六年間に『管子』に関わる論著も何篇か増加した。北京図書館を訪れる前々日お眼にかかった故王疏瑚教授らが尽力された『管子』経済篇文注釈^{VI-III}等々、貴重な業績も多い。しかしながら、私が本稿に述べたような状況は基本的に変化してはいないと考えられよう。

『宋楊忱本』を見るまでは、『管子』に関わる論を発表すまいと考えていた自らの禁を破って、私自身地員篇を扱って(16)みた。しかしながら、自分自身得心できる本文校訂を行なっていない後めたさは敬うべくもない。

今日、遽かに発表の機会を与えられ、あえて、未完(本稿に「宋楊忱本」と記した部分)は実は影印刻本によるものである、という不徹底さの意を含めて)のこの拙文を公けにする所以は、「宋楊忱本」行方不明という事態に注意を払って下さる諸先輩がおいでになれば、と俾濫するの余りである。

浅学非才ゆえの文中非礼の辞を御寛恕賜り、御叱正並びに御示教を賜りうれば、望外の幸甚である。

(一九八四・五・二二)

註

- (1) 『中国文化叢書』③『思想史』 表I—31。なお、以下、本稿で言及する諸論文のうち、表I—Vに挙げたものについては、その番号のみを示し、いちいち註記しない。
- (2) 王應麟『漢書藝文志考證』所引。
- (3) 『評胡適之中國哲學史大綱』『飲冰室文集』三十八所収。(もと北京大學哲學社講演)
- (4) いうまでもなく、これは微々たる量であり、殊に表Iに属すべきものは、他にも多々ある。が、便宜上、選択は百十篇にとどめた。選択の基準は、できる限り多方面からの分析を網羅するよう務めたが、『管子』に関連しない『管仲論』の類は一切省いた。また『管子集校』所引の校釈書、及びそれに類似する旧来の訓詁考証的論述も、

ほとんど省いた。個々について選択のしかたに問題があるものについては、表の備考欄に付記した。研究状況の大勢は示しうるだろう。

(5) 宋鉞・尹文遺著説に対しては、『管子』の側からでなく、宋鉞・尹文の思想を究明する立場からも反論が提出されている。山田統「宋鉞という人間とその思想」(『国学院雑誌』63巻12号)、金谷治「宋鉞の思想について」(『中国古典研究』14号)など。

(6) 金谷治『秦漢思想史研究』第二章漢初の道家思潮。

(7) 宋楊忱本に拠る涵芬樓影印本(以下四部叢刊本と称す)及び張瑛影刻本には、「前之循制」に作る。中都四子本に拠って表記した。尚、以下、行文に用いる『管子』の原文及び旧注は、原則として四部叢刊本に拠る。

(8) 四部叢刊本は「偏授」に作る。中都四子本に拠り改めた。

(9) ここに私が述べるのは、あくまで『管子』研究の現状に即してであり、上原淳道氏が山田統著『老子』の書評(『歴史学研究』第二二二号)で必要性を述べられた、一般の古代史研究における「可能性の指摘・可能性の発見」を、否定せんとするものではない。

(10) かかる意味では、武内義雄氏の「管子の心術と内業」は、短編ながら、基本的な態度において、優れた論考であると思われる。心術篇を経言類に収めるべきであり、「區言類」は「區言類」の誤まりだ、との指摘は、十分に検討する余地がある。しかしながら、その結論である『管子』を稷下の法家学者等の手に成るとする発想は、本稿で述べた、他の論者と同様であるといわねばならない。

(11) 狩野直喜『中国哲学史』における『管子』への言及は、経言類を管仲の自撰と「信する」など、今日から見れば、不十分な点は多い。しかし、全書に通貫する特性を抽出する姿勢において、また『管子』全書を総合的に把握しうる能力とエネルギーにおいて、近年の諸研究は、狩野の地歩を超えてはいないのではないか。

(12) 野原四郎・佐藤武敏・上原淳道訳『中国古代の思想家たち』下「中国古代史に関する郭沫若氏の主要著書論文」。

(13) 四部叢刊本は「非吾所願」に作る。中都四子本により、「一」所「字」を衍と見て削った。

(14) 原文「貸」に作る。前後関係及び、俞樾説から見て「伐」字の誤まりであろう。

(15) 『管子集校』一〇六頁・一六〇頁など。

(16) 拙稿『管子』地員篇における土壌認識の側面(『中国古代史研究第五』雄山閣一九八二)。

補注 本稿校正中、馬非百『管子輕重篇新註』・趙守正『管子評釈』・陳紹聞主編『中国古代經濟文選』第二分冊・胡寄窗『中国古代經濟思想的光輝成就』等々、一九八〇年以降に刊行・輸入された重要論著の相当数を、上表に録入し忘れたことに気づいた。本稿の主旨には当関わりないと思われるため、補訂は後日を期したい。